

週刊センターニュース No.259



第259号(2009年5月18日) 毎週月曜日発行
発行：金沢大学 大学教育開発・支援センター
URL：http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyuu_rche/index.htm

○●○ 第231回共同学習会のご案内 ○●○

日時：5月21日(木) 16時30分～18時

会場：角間キャンパス総合教育1号館6階E1講義室

企画：青野 透(教育支援システム研究部門、障害学生支援委員会委員)

報告者：青野 透

テーマ：「青年期の発達障害者への支援を考えるー発達障害2ー」

企画趣旨：私たちは、第225回共同学習会(4月2日開催)「困った学生の子どもの頃はひょっとしたらー発達障害1ー」で、大井学教授(学校教育系・障害児教育講座)から、発達障害の定義、診断法、そして具体的な例などについて学ぶ機会を得ました。中村学長にもご参加いただき、正確な知識から問題を考えることを始めました。

シリーズとしての第2回は、ビデオ教材により、青年期・成人の発達障害者の実際の状況を学び、参加者によるフリーなトークの場と致します。

子どもたちの発達障害については、新聞などでも、とりあげられるようになってきました。初中等の学校教育における対応は進みつつあるようです。けれども、発達障害と診断された大人たちの直接の声を聴く機会はありません。とくに、高等教育機関として意識しなければならないのは、他の学生と同様、発達障害のある学生にたいしても、丁寧にキャリア教育そして、就職活動支援を行う必要があるということです。最後の教育機関として、出口を常に意識しておかねばなりません。そのさいに、一人一人の教職員には、実際に今の社会で、企業で、発達障害者がどのような就労を行っているのかについての知識がまずは求められます。

教職員だけでなく、学生、院生など、関心をお持ちの皆さんの参加を期待します。

教材とするDVDは、次のものです。

『青年期、成人期の発達障害者支援』第1巻 発達障害を知っていますか、第2巻 生活・余暇・就労をめぐる(合計63分)

解説・監修＝梅永雄二(宇都宮大学教育学部教授)、医学解説＝内山登紀夫(大妻女子大学教授/よこはま発達クリニック院長)、企画・制作＝星屑倶楽部(中島映像教材出版 製作・出版部)
(HPによる推薦文 [成人期の発達障害対策こそ急務](#))

この映像教材は、知的障害を伴わない、発達障害のある成人の方たちによって構成されています。一見しただけでは、発達障害とはわからない人たちです。この映像教材を大学生に見せたところ、「普通に生活できるし、だからこそ障害がまわりの人に見えにくく、本人は辛いだろうと思った」という感想が寄せられました。・・・この映像教材では、見えない、しかし実存する障害を感じ取ることができます。成人期だけではなく、児童期の保護者、関係者にも育児や教育面で示唆に富む内容と思ひ、ここに推薦いたします。 早稲田大学客員教授/ (社)発達協会王子クリニック 湯汲 英史)

〇〇〇 感想紙の共有 〇〇〇

授業の感想紙を読むことはとても楽しい。今日の内容がうまく伝わったと感じるとニヤニヤするし、不十分な点が指摘されれば意気消沈する。たまに見過ごされがちな発言を拾って自分の意見を書いてくれると、その学生を目の前に浮かべて感謝したくなる。私の最近嬉しかった記述は「難しいの反対がやさしいでないという話がしっくりきた。…」である。「(人にものを伝える表現として) 単にやさしい言葉を使えばよいというのではなく、共感できる伝え方をする」との一言を拾ってくれた。

学生も同じであろう。自分の感想や質問が授業の一部として取りあげられたら、やはり嬉しい。前回の質問や感想から次の授業を始める構成は典型的だが、他の学生の質問や感想によって共感したり、視点を学んだりする重要な機会だといえる。使い古された感はあるが、感想紙は学生の声を聞く手段として極めて有効なツールである。大学教育開発・支援センターでは先月「第2回 教育効果とFDに関する教員アンケート*」の調査結果を行った。その設問 21(学生の学習意欲を高める工夫)にて、教員の一人が「毎回、短文の質問や意見、感想を授業終了時に書かせ、自分の到達度、未到達度の自覚を促す。また、それらに教員が丁寧に答えることによって、新たな関心の掘り起こしや他の受講生の関心を把握するようにしている」と答えており、学生の動機づけや授業への発展性の面からも有用性を強調している。

ここで読まれなかった感想紙の対処について考えてみたい。授業時間の関係上、紹介される感想は教員が選んだ数枚～十数枚に限定されてしまう。授業展開には影響しなくとも、多様な意見の中に自分の意見と同じ学生がいて自信をもったり、視点の違いに感銘を受けたりする可能性は捨てがたい。私が学生の頃、縮小コピーをしてほぼ全員の感想表を配布してくれた先生がいた。受講生は30人ぐらいだったと思う。その程度の人数といえば大したことはないが、私にとって他人の感想は一週間後の楽しみではあった。以上の点で教員が選択しなかった感想や意見・質問の共有も学生に与える影響としては大きいのではないだろうか。

所属の関係上、少しだけ紹介すると、本学ではアカンサスポータルを利用してデジタル資料を掲載することができる。掲載してしまえば、一週間を待たずして学生に他人の感想を閲覧させる機会を提供できるし、デジタル化するので保存性もよい。(ちなみに教員側には感想紙をスキャンする手間を要するが、連続コピーをするかの如くPDF化してくれる機械が3～4万円で購入可能である)

もちろん、必ずしも全ての感想を共有する必要はない。記述内容に悪意ある個人攻撃が含まれていたり、他の閲覧者に良くない影響を与えたりするおそれもある。この場合は教員が掲載を控える必要があるだろう。

先に挙げた第2回 教育効果とFDに関する教員アンケートの設問 21(学生の学習意欲を高める工夫)では、「グループワーク」に関する記述が多数見られた。デリケートな内容でない限り、感想の共有はグループワークでの仲間関係を構築材料として有用だと筆者は考えている。「前回鋭い質問をしていた〇〇さんね」というように。

本稿では、学生間における感想紙の共有について個人的な観点から述べさせていただいた。実践されている先生方は既に多数いらっしゃるかと予想されるが、授業期間の中間に感想紙の有用性を再考していただくため敢えて紙面をいただいた。もちろん、共有の場としてポータルを使っただけならば幸いである。

* 2009年3月31日～5月13日に実施され、現在集計中。集計次第、週刊センターニュースや大学教育開発・支援センター主催共同学習会などで公表し、アカンサスポータル内の「アカンサスFD」に掲載する予定である。